

芦屋市指定文化財指定候補

寺田遺跡出土黄釉鉄絵盤
比較調査報告書

平成 25 年 3 月

芦屋市文化財保護審議会

第1章 はじめに

第1節 寺田遺跡出土黄釉鉄絵盤出土の経緯

本資料は、平成13年度に実施された寺田遺跡第139地点の発掘調査により出土したものである。本地点の所在地は、兵庫県芦屋市西芦屋町30番1, 2である。調査面積は780㎡を測る。発掘調査期間は、平成13年9月20日～平成14年2月14日である。

第2節 寺田遺跡の概要

本資料が出土した寺田遺跡は、芦屋川の右岸扇状地上に存在する。遺跡は東西500m、南北250mの範囲に広がるもので、市内では最も濃密に埋蔵文化財を包蔵する遺跡として知られている。現在は三条南町、西芦屋町一帯に所在し、北側に阪急電鉄神戸線、南側にJR東海道本線を控える住宅街にある。遺跡の発見は昭和30年代に遡るが、本格的な発掘調査は昭和59年から行われており、平成24年2月28日現在、調査件数は第220次を数える。

寺田遺跡では、縄文時代から近世にわたる遺構や遺物が見つかっており、特に古墳時代から古代にかけては集落や官衙が集中して営まれ、古代摂津国菟原郡の中枢部に立地していたと推定される。これまでに、この遺跡からは特筆すべき遺物が多数出土しており、中でも芦屋廃寺跡と密接に関連する法隆寺式軒瓦や高句麗系軒丸瓦、郡領層大領・少領の往来を示す墨書土器などが見つかっており、郡衙など重要な諸施設があった場所と推定されている。

第3節 出土地点の概要

寺田遺跡第139地点では、5面の遺構面を対象として発掘調査が実施されている。遺構面の帰属時期は、第1遺構面（鎌倉時代頃）、第2遺構面（古墳時代後期末頃）、第3遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期頃）、第4遺構面（弥生時代中期頃）、第5遺構面（縄文時代代晩期頃）である。

本地点は、中世遺構の中枢部が確認されたことを一つの特色とする。第139地点東部の遺構集中部では大型建物が認められ、適度な空き地（庭）をもってより西方では、緊密な様相は薄れる。建物近くのピット中から出土した黄釉鉄絵盤は、稀少価値を持つ貿易陶磁であるが、東播系須恵器捏鉢と共伴しており、地鎮など建物祭祀と関わるものと推測される。周辺の土器類は椀・皿が多く、鍋・釜などが極めて少ない。炊さんより供膳具の容器が多い傾向をもち、日常的な生活臭が少ない場所で発見されたものである。立派な屋敷地の性格をある程度、反映した遺物といえる。

第4節 出土状態について

黄釉鉄絵盤は、調査区中央部の南寄りのところで検出されたピット（穴）から出土している。遺構番号は、SP055である。ピットは、平面略円形を呈し、直径35cm、深さ30cmを計測する。出土時点から故意に破砕されたものであり、この上に須恵器捏鉢片が覆うように出土している。この須恵器片は生産地が東播磨に特定できるものであり、黄釉鉄絵盤との共存関係から、年代を考える上で根拠を与える資料となった。

また、遺物包含層ではなく、年代の判断が可能な遺構からの出土品としても学術上の価値は高い。

第2章 比較調査について

第1節 比較調査の経過について

平成24年8月17日に開催された平成24年度第1回芦屋市文化財保護審議会において、指定文化財の指定にあたって、類例を探索し、現物照合の上、比較調査することとなった。比較調査の対象となったのは、尼崎市教育委員会の大物遺跡例及び京都大学文化財総合センターの平安京跡例である。以下に、調査の内容について記す。

(1) 大物遺跡出土品 黄釉鉄絵盤比較調査

調査場所 尼崎市教育委員会 文化財収蔵庫

遺跡名 大物遺跡

調査日 平成24年11月15日(木)

調査者 芦屋市文化財保護審議会副会長安部みき子(考古資料担当)

随行者 芦屋市教育委員会生涯学習課主査(学芸員)竹村忠洋・学芸員森岡秀人

調査内容 実物実見及び撮影

(2) 平安京跡出土品 黄釉鉄絵盤比較調査

調査場所 京都大学文化財総合研究センター 尊壤堂(京都府京都市左京区吉田本町)

遺跡名 平安京跡

調査日 平成24年11月29日(木)

調査者 芦屋市文化財保護審議会副会長安部みき子(考古資料担当)

随行者 芦屋市教育委員会生涯学習課学芸員森岡秀人

調査内容 実物実見及び撮影

第2節 大物遺跡出土資料

(1) 遺跡の概要

遺跡は、兵庫県尼崎市大物町2丁目に位置する。平成7年度に実施された阪神・淡路大震災に伴う復興調査で確認された遺跡である。市営住宅建設を目的とする工事の事前調査により、平安時代末から鎌倉時代前期の遺物が大量に出土しており、交通の要所として知られる「大物浦」「大物浜」との関与を示す遺跡として注目されている。

(2) 出土した黄釉鉄絵盤について

出土資料は膨大で、12世紀初頭から13世紀後半にかけての遺物がおよそ350箱のコンテナが満載となる量である。また、17～19世紀の遺物も数多くみられ、約250箱出土して

いる。

中世遺物の内訳は、土器・土製品・木製品・金属製品・石製品で、骨角製品・動物遺体・植物遺体ほかがあり、骨・貝・種子をはじめ、腐朽しやすいものも数多く残っていた。土器類の構成は、畿内系土師器、非畿内系土師器や黒色土器・瓦器・国産陶器・貿易陶磁器などである。

黄釉鉄絵盤は、A-II区黒灰色粘土混じり砂層から出土している。口径30.2cm、底径25.5cm、器高8.4cmを計測する。体部は丸みをもち、口縁部は肥厚させ断面が方形となっている。目跡とみられるものが口縁部の内面に付着する。露胎部分は赤褐色を呈し、外面上部に黄緑釉をかぶる。褐釉による鉄絵で草花文を描いている。

第3節 平安京出土資料

(1) 遺跡の概要

黄釉鉄絵盤は、京都大学本部構内AW27区の土坑SK3出土資料である。発掘調査は、昭和62年11月～昭和63年3月に実施されている。調査面積は、1604㎡。調査機関は、京都大学埋蔵文化財調査研究センターである。京都府京都市左京区吉田本町にある構内遺跡内での位置は、ほぼ中央部で吉田山の西麓に位置する。標高59～60mほどの北白川扇状地の扇央部付近である。

この土坑は幅2m、深さ1mを測る大きさで、調査区外に広がる。坑内から、土師器皿・土師器椀・瓦器椀・土鍋・羽釜・盤・青磁碗・白磁碗・皿や銅製飾金具・鋌・鉄製農具（鋤ないしは、鋳）が出土しており、これらに伴って黄釉鉄絵盤が出土している。時期は13世紀中葉～後半のものである。13世紀を中心とする遺物包含層は、第3層（黄褐色土）として存在する。出土した遺物の性格は大量の廃棄物と考えられ、廃棄場であったと推定されている。

(2) 出土した黄釉鉄絵盤について

Aは、口径22.0cmを計測する。口縁部端面は玉縁状を呈する。胎土には、砂礫をまじえる。外面上半に黄褐色の釉を施している。鉄絵はみられない。

Bは、口径34cm前後を測る。口縁部は玉縁状に作られる。体部は膨らむ。内面から体部上半には、黄褐釉を分厚く掛けている。口縁部の外面には、2条の線が施され、端面には三角形の文様が描かれている。体部下半には波状文と直線文が施されている。見込みには二重の同心円文が描かれ、その中に4本単位の二重の同心円文の中に交差させ、それぞれの中心部に一字ずつ長寿を祝う吉祥句を配している（「福海壽山」）。底部は上げ底風を作る。

Cは、類似する形態で、口径34cmぐらいの大きさである。口縁部は玉縁状を呈する。文様は体部下半に波状文と円弧を描き、見込みには円弧を書き、中央に花柄を「十」字形に配して、葉が伸びる構図をとる。

第3章 生産地と消費地について

黄釉陶器類の生産場所は、中国華南地方であり、福建省泉州の磁窰窯であることが判明している。また、消費地では、いわゆる平清盛の時代と結びつく遺跡における実例が多い。博多遺跡群（福岡市）は、その有力拠点である。昭和 52 年から発掘調査が継続的に実施され、大陸交流の門戸的役割を果たしていたことが明らかになっている。12 世紀の地形と都市構造をみると、砂丘の発達が著しい特徴であり、注目すべき草花文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦などが出土する。13 世紀後半には完全に姿を消すものであるが、黄釉鉄絵盤と関連づけられるものである。日本列島系の瓦当ではないことが確実な資料で、宋の商人との関係が考えられる。宋から技術者が渡海し、博多湾周辺で生産したことが考えられる。居留の宋人との関わり、禪宗寺院や有力華僑との関係も考えられる。軒丸瓦文様と北宋末の黄釉鉄絵盤との影響関係が判明しているが、それはまさに唐房、すなわち中国商人の往来と店の建設、その背景にある日宋貿易の確立などを示唆するものである。

神戸市所在の楠・荒田町遺跡も重要な関連遺跡の一つであり、伝・平頼盛の邸宅跡の近辺に位置し、創建の古い荒田八幡神社の隣接部に位置する。神戸大学病院関連調査により、大型建物や条里方向に並走する 2 本の堀が発掘されている。大型掘立柱建物（平安時代末期段階）は、邸宅と推定されている。近接する雪御所遺跡も欠くことのできない関連遺跡であり、地名としての雪御所町の存在は興味深い。昭和 62 年の調査では、湊山小学校の建替えに伴う発掘で、石垣の検出があり、カワラケ多数が出土するも福原京関連の遺跡はさらに隣接する地域に存在するようである。北には清盛邸の推定もなされている。

神戸市所在の祇園遺跡は、庭園遺構や平安末期の導水路・排水路・石垣・土坑が検出されており、二度にわたる造り替えが確認された。12 世紀後半の年代を示す石敷・浮島・堤から大石敷、皿など大量廃棄があり、さらにそれを広げる形で、玉石・洲浜が存在する。「房」字墨書土器の存在や中国産白磁・青磁、中国産最高級天目碗などがあり、後者は江西省産とみられる。平家一門の屋敷地の一角が解明された遺跡であり、中国産のものが目立つことは、関連強い遺跡として認識できよう。

比較の上で重視した尼崎市所在の大物遺跡は、震災復興の事前発掘調査で見つかり、出土量に圧倒される土器類や遺物が発掘されている。大物神社の近辺には、神崎川河口があるいわゆる河尻泊であり、平安京への中継地として注目される。墨書土器・丁綱（ていこう）の存在から、店舗や工房と考えられる施設も推定されている。

平安京と福原の中間地としての意味合いが考えられ、瀬戸内ルートの要として港湾遺跡の性格が重要である。

国際的な遺物が尼崎や芦屋で出土することの意義については、大輪田泊経由の可能性が強く、貴重な貿易陶磁の背景を知る二、三の遺跡を指定に際し、考慮に入れた。

第4章 総括

これまで記してきた指定候補の比較調査の結果を踏まえ、疑問点や精査点など留意すべきことがらの二、三について述べる。

まず、指定文化財の名称に関してであるが、「黄釉陶器盤」の名称も多く、陶器である焼成温度や素地土変化を重視すれば、「黄釉鉄絵陶器盤」などの表記がより適切と思われる。釉調・絵柄、陶磁の別、器種などを網羅した文化財名称として、適切な長さも勘案されるべきである。「おうゆう」「こうゆう」の読み方については、他の用語との間でセットになる可能性があり、音読みとすべきであるが、中国関係資料に基づき、「こうゆう」を選択する方が適切と考えられる。

産地については、中国華南の福建省磁灶窯産に特定できることは明確であり、具体的な窯が中国考古学では、報告されている。福建省「磁竈窯」との用字で日本的にする方がわかりやすいと考えられる。

なお、陶磁学界では、「輸入陶磁器」という用語が大変問題視されている現状から、「貿易陶磁」の呼称を使用する方向性にあること、「輸入陶磁器」「輸出陶磁器」は、個別国単位の一方的な学術用語で、双方向的な歴史学用語ではないことなどが理由とされる。現在、国際性ある視野からの陶磁群の扱いが研究面では浸透してきており、「貿易陶磁」という用語の用例は学問的にも一般的にも安定してきているので、本用語を用いる方針とした。

博多は、古代那津に出发点があり、日本中世史では、津の性格よりも施設・構造を含め、「貿易港」の認識、港湾としての把握が浸透していることなどから、博多津の呼称でもよいが、わかりよい用語として博多港と理解すべき時期と考えられる。この博多における出土状況は、多数という評価よりも絶対的な集中性に力点がおかれた歴史的評価になり、博多―瀬戸内―大阪湾北岸―淀川―平安京での今後の出土例増加が十分考えられる。平氏政権下での流通は考えられてよく、逆に源氏政権下では抑制されたと考えられる。調査結果では、平安京における事例は、13世紀に下降するものが結構多く、平氏政権下以降での流通は考えられてよいし、東限資料として長野県出土例が存在することも、交通ルートや物資流通を考える上に見逃せない。

渡来経路は華南からではなく、明州における集約が確実視されること、対外的な貿易ルートが主力で、現状では個別ルートは消極的にならざるを得ない。すなわち、貿易による列島流入品ととらえてほぼ間違いないと考えられる。ただし、輸入・輸出の品目や交換文物をはじめ、その関係性までは明らかにはできなかつた。なお、博多以外に薩摩国坊津に有力な本邦集散地が存在し、その場合は土佐沖を通過する太平洋ルートによる流入が想定されることになる。ただし、時期的な検討が必要で、太平洋ルートの場合、日明貿易段階での力点が高いことなどから、12～13世紀の太平洋ルートはその点で否定的とならざるを得ない。本資料の来歴を考える上で、太平洋ルートに関してはね12世紀～13世紀の段階では除外してもよいと考えられる。

尼崎市大物遺跡の中継的物流拠点としての性格は、瀬戸内の問題以上に淀川、三国川川尻の河口拠点として、たえず平安京という終着点を意識に入れる必要があり、その説明では、淀川との対比において、現行河川である「神崎川」の名称を採用する方がわかりやすいと思われる。

本資料は国際交流的な性格、側面を多分に持っており、芦屋らしい文化遺産としての評価も付加価値として存在する。なお、古代末期～中世初期の芦屋の港津が直接受容するケースは、ほぼ否定でき、外交船に積載されたものとみてよいので、間接的な流入の契機を考えておきたい。

用途について、中国での本来の用途は、飲食関係とみるより、洗面器と考えている人も多く、使途に関しては、今後も適切な資料批判が必要と考えられる。

なお、大輪田→大物の伝来ルートは蓋然性も高く、したがって、大物→寺田という遺跡間の流通も十分考えられる。

遺跡内における性格に関し、土器を割る儀礼行為において、地鎮という遺構の具体像の中に、結界祭祀や土地境界祭祀、屋敷地境の祭りなどが含まれると考えられる。

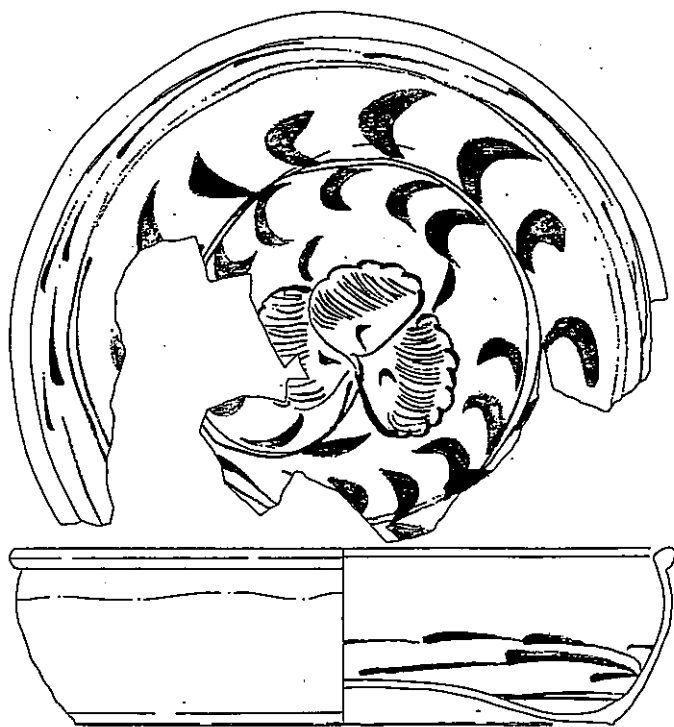
所持者の性格については、貴族層もしくは平氏関係の一部武士層の可能性が考えられ、有力農民層のさらに上層エリート層の京化、都化の影響など、上層名主層クラスの点在は、12～13世紀の家地と遺物相から推して、芦屋では十分考えられる。また、日本列島東部にあっては、舶載陶器として、貴重視されていたことは疑いない。

この資料の持つ年代観も問題がある。通常、中国本土での伝世はありえず、日本列島に招来されてからの伝世品の可能性はきわめて高い。伴出土器などから想定される年代はあくまで廃棄年代であって、製作年代は12世紀前半に遡る可能性も十分考えられ、寺田遺跡出土黄釉鉄絵盤は日本列島内部での伝世を考える方が蓋然性がより大きいとみられる。

牡丹文も草葉文も退化した変化があり、寺田遺跡例は12世紀後半でも第3四半期あたりの伝播年代は可能とみられる。ただし、生産年代は少し古くなる可能性がある。一方、大物遺跡例はより新しく、平安京跡例はさらにより新しいものと考えられる。

したがって、現状資料はなお少ないものの、瀬戸内圏以西では、全変遷自体が13世紀代にほぼ収まると考えられる。

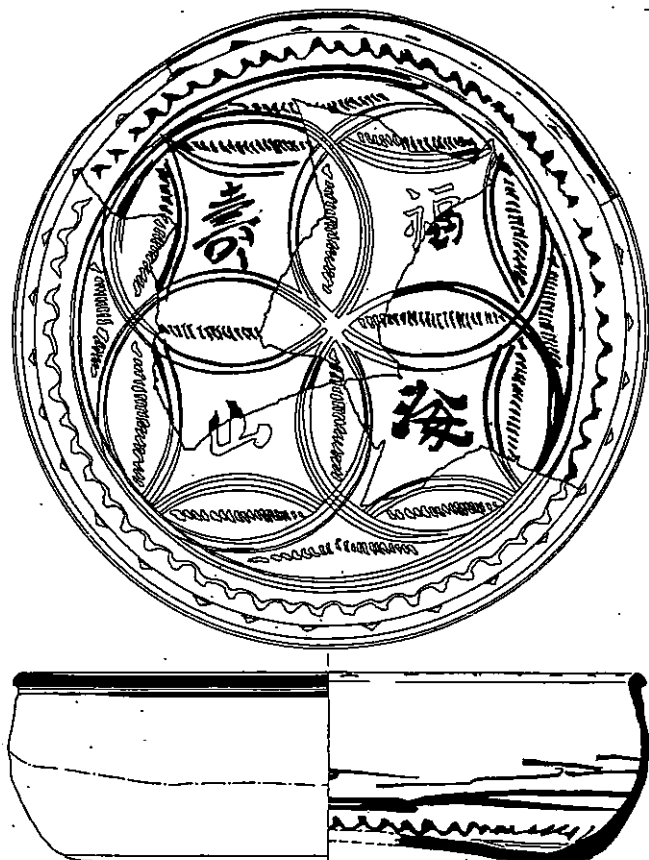
本資料は、唐房などで取り扱われたか、既に武士・貴族階層の館跡での使用、消費中のケースを考えるのが妥当であるが、日本に入ってから、高級貿易陶磁なだけに、特殊な祭儀に供せられることはあり得ると考えられる。使用実態の調査はほとんどなし得ないが、少なくとも、中国本土のような洗面器など雑器的な取り扱い方はないと考えられる。



寺田遺跡 (兵庫県芦屋市)

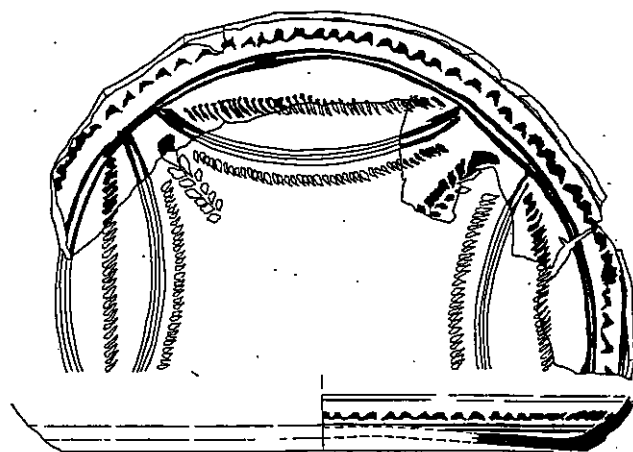


大物遺跡 (兵庫県尼崎市)



平安京 (京都府京都市左京区)

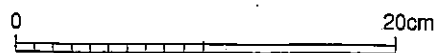
B

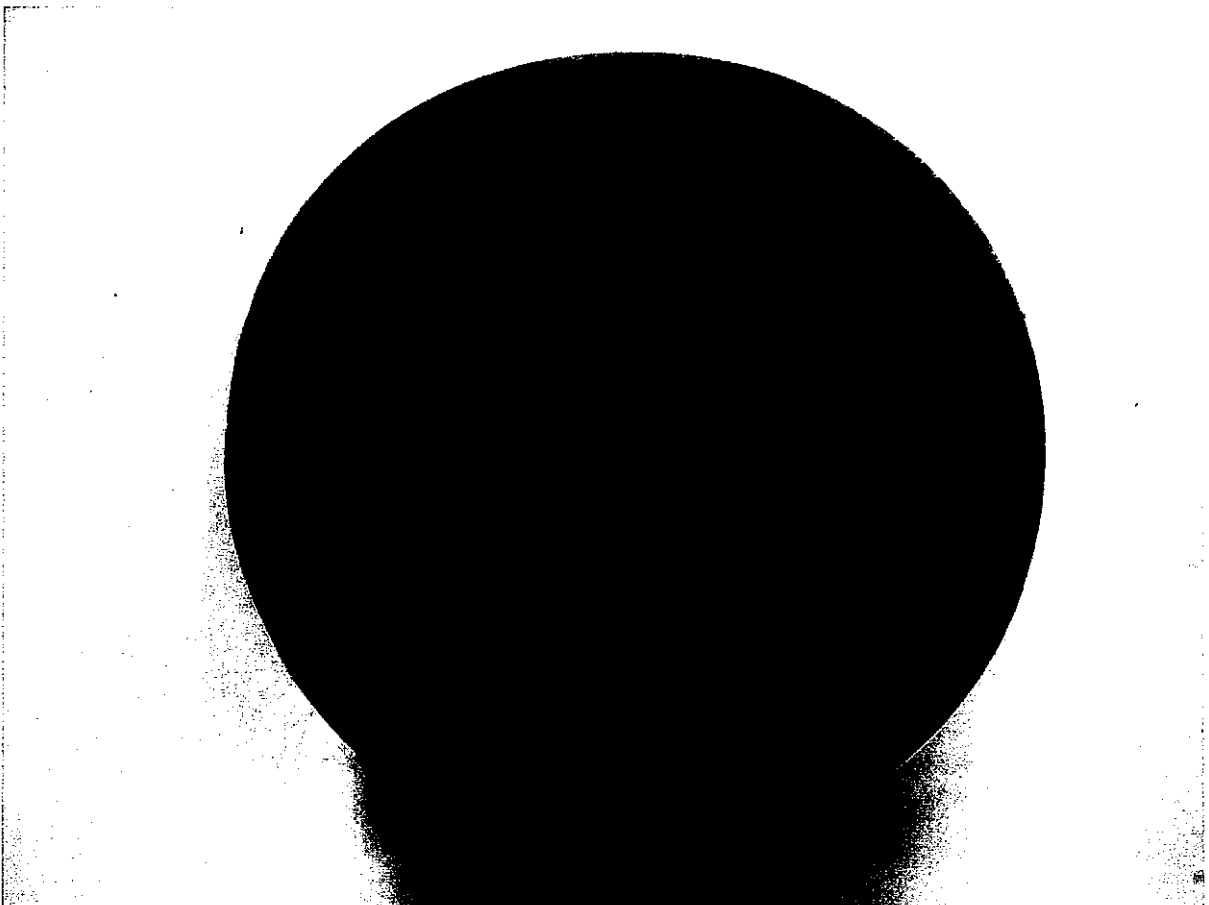
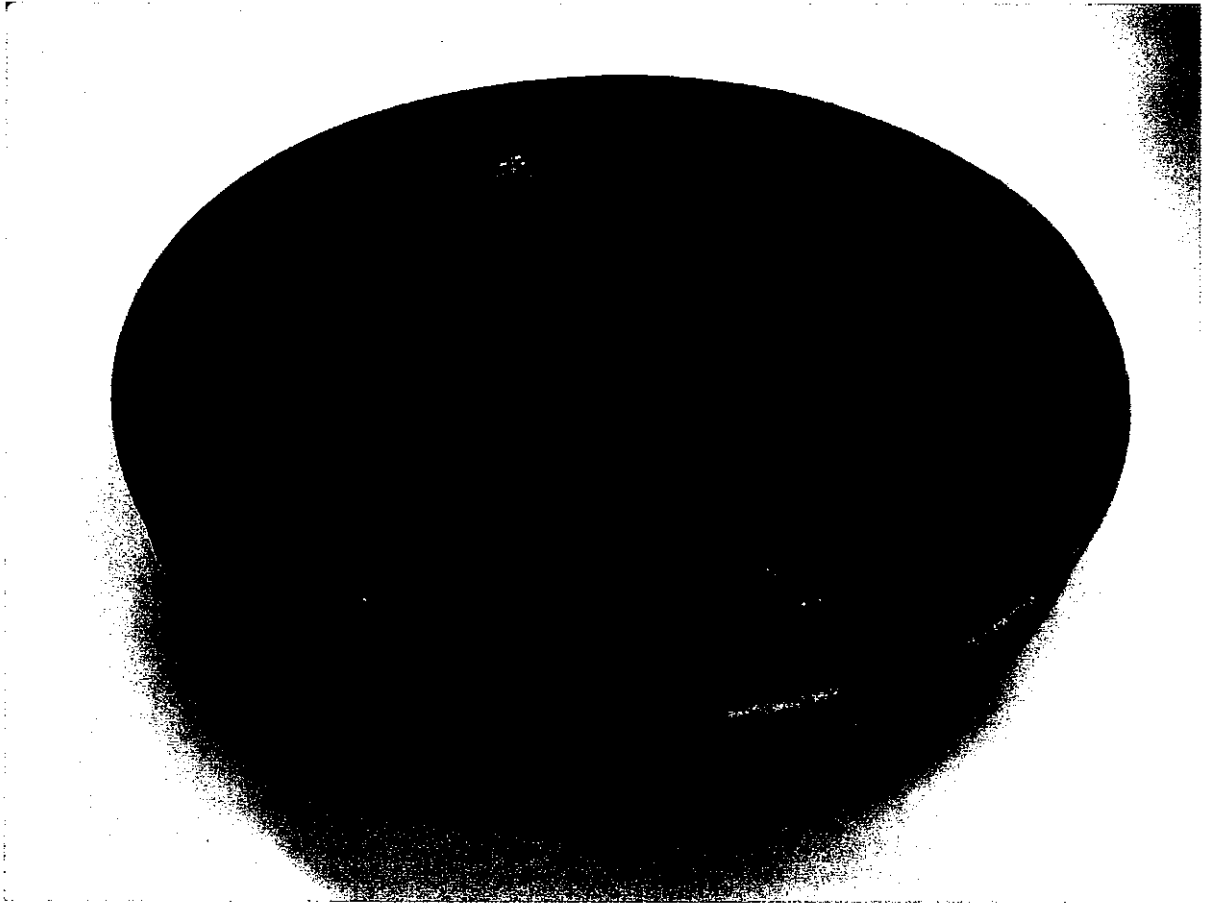


C



A





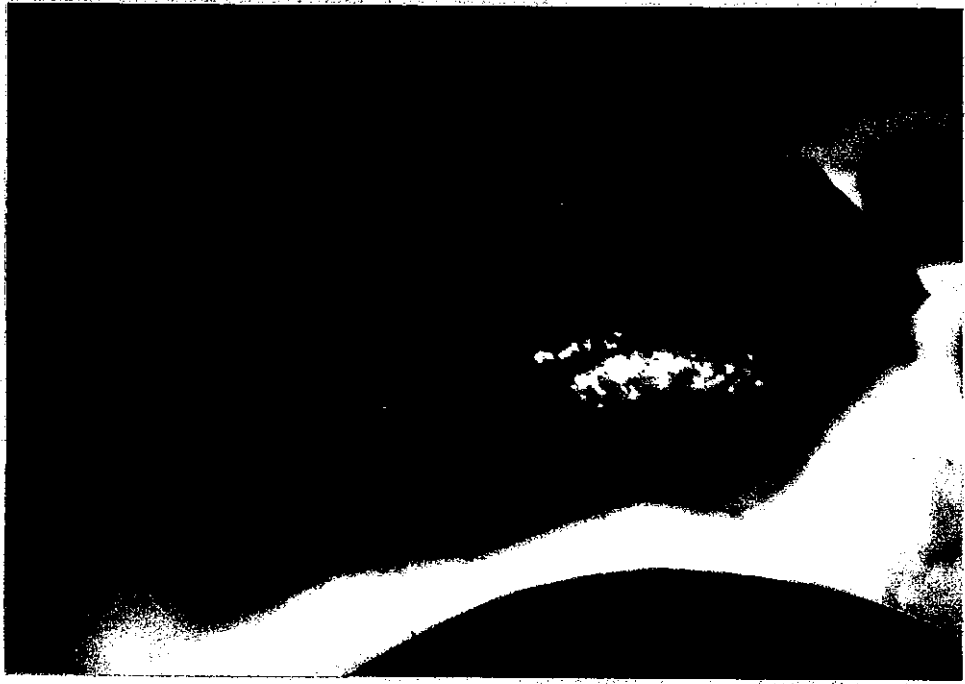
芦屋市寺田遺跡出土黄釉鉄絵盤



類例資料 大物遺跡（兵庫県尼崎市）



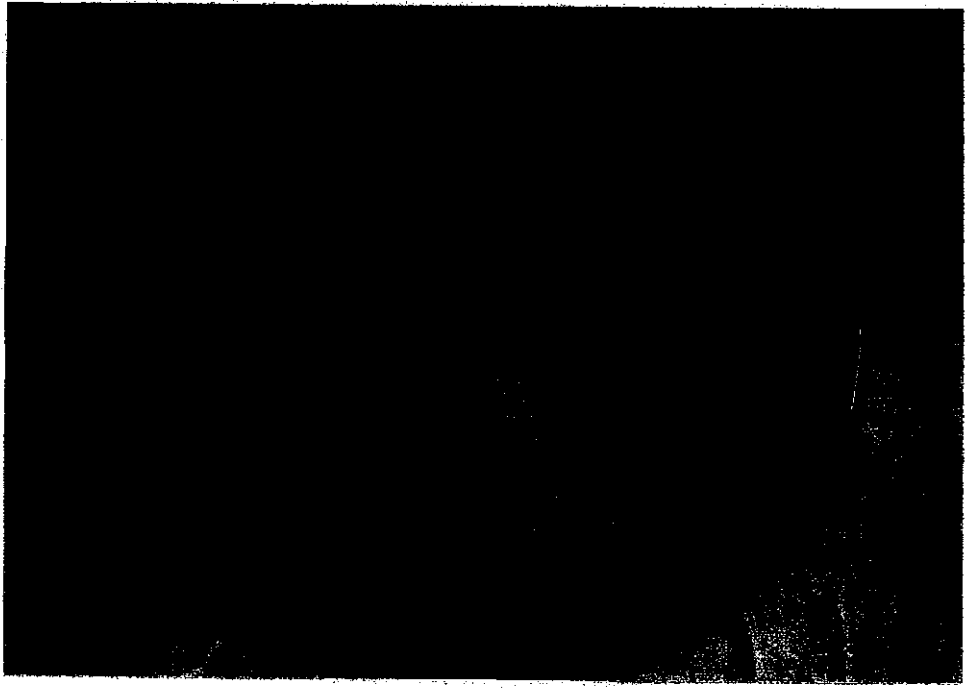
類例資料 大物遺跡（兵庫県尼崎市）



類例資料 平安京（京都府京都市左京区）A



類例資料 平安京（京都府京都市左京区）B



類例資料 平安京（京都府京都市左京区）B



類例資料 平安京（京都府京都市左京区）C